
けいおん！ ～桜が丘の原石たち～

七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ～桜が丘の原石たち～

【Nコード】

N88980

【作者名】

七海

【あらすじ】

今年度から共学になった私立桜が丘高校。そこに入学した藍沢（あいざわ）一臣を中心に放課後ティータイムと仲間たちが繰り広げるサクセスストーリー。はたして放課後ティータイムはどうなっていくのか？

プロローグ（前書き）

この小説はけいおん！の二次創作です。

桜が丘高校共学制、オリキャラが存在するため、不快に思われる方は読まないことをお勧めいたします。

プロローグ

ライブハウス『ミネラーレMineral』

「みんな！『SOUND STRIKE』のライブに来てくれてありがとう！次のライブもよろしくね！」

『SOUND STRIKE』が舞台袖に下がった後も、観客は残っている。

そしてどこからともなくアンコールがかかる・・・観客は誰1人として帰る気配はない。

ライブハウスのボルテージが上がり、最高潮に達しようかという時、「アンコールありがとう！じゃあ後2曲だけ！盛り上げていくよ！」

この日ライブハウス『Mineral』は最高の雰囲気です幕を閉じた。

某居酒屋

「いやあ気持ち良かった！やっぱりライブはいいよな！」

今、『SOUND STRIKE』のメンバーは打ち上げの最中だ。酒の回ったGetのセイさんは1人でテンションが上がっている。確言う俺、藍沢あいざわ 臣しんもライブ空けの余韻に浸ってこの空気に酔っている。

観客が自分たちの演奏で最高のひと時を楽しむ。

1人でやっているには絶対に味わえない感覚だ。

念のために言っておくが、未成年なので当然飲酒はしていない。

セイさんは、俺やV.O.のナナさんに飲ませようとしてくるがうまくかわしている。

というかDr.のヤスさんは自分のペースで飲んでないでセイさん止めてくださいよ・・・

俺はヤスさんに懇願するような視線を投げかける。

「今日くらいいいじゃねえか。ライブのあとくらいはめ外させてやれ。」

ヤスさんはそういつて自分の世界へと戻っていく・・・

俺とナナさんはセイの絡みを回避しつつ今日のライブについて話していた。

「でもさ、最近の私たちって結構有名になってるらしいよ。」

「そうなんですか？でもまだ結成して半年くらいだし・・・俺なん

「てまだまだ甘いですよ。」

「いやいや！俺らもう関係者たちからは地元No.1バンドって噂されてんだぜ！？ヤスんところに『TOY BOX Music』から打診あつたしな！」

「『TOY BOX Music』って本当ですか！？」

『TOY BOX Music』は日本最大手の芸能事務所で、所属しているバンドの新曲がよく週間ランキング上位にランクインしている。

そのスカウトは神出鬼没。

名刺などは存在せず、勧誘方法はアポなし直接交渉のみ。

嘘のような話だが、公式サイトのトップにはスカウトの証明としてただ一言。

『T・B・Mの純金プレートの保持。』

これだけが書かれている。

当然プレートが見えていない状態では一般人と見分けがつかない。

「「はあ！？俺（私）そんな話聞いてないけど（わよ）！？」」

そんな最大手事務所からの誘いを全く相談されていないのは驚いた。どうやらナナさんもしらなかつたらしい。

「その話なら今はまだ考えてないって断つといた。」

ヤスさんはなんでもないのであっさりそう告げた。

「えっ・・・ヤスさんなんでデビューの話断つたんですか？」

俺はヤスさんが断つた理由がわからなかった。

そもそも俺たち『SOUND STRIKE』はプロを目指しているわけで今回の話はまさに1つの目標だったはずなのだ。

『TOY BOX Music』は名刺が存在しないのでアポをとることなどできない。

次にいつこんな話が回ってくるかわからないのに・・・

「シンはまだ中学卒業したところだろう。これから音楽で食っていくにしても、最低限高校くらいは卒業しておいたほうがいい。高校に通いながらプロやるなんてできないからな。」

ヤスさんはそういつてまた戻って行った。

「そっかあシンはまだ15だもんね。高校はどこ行くか決まったの？」

「近いところで私立桜が丘高校に決めました。校舎もきれいでした

し。」

「私立桜が丘？あそこって女子高じゃなかったっけ？」

「来年度？今年度？から少子化で共学になるようですよ。俺以外にも何人が受けてましたし。」

「へ〜桜が丘かあ〜うんうん、あそこはたしかにこのへんだと一番いいかな？」

ナナさんは一人で自己完結している。

メジャーデビューの話に関してはヤスさんの意見を聞いて納得したようだ。

まあ校舎はきれいで、学力もこの辺の高校では高いし、家からも近い。

共学化してくれたことには本当に感謝だな。

「お〜い！シン！オマエは元女子高なんて選んで〜ナニするつもりだあ？」

気づいたらセイさんはもう出来上がってるし、時間的にもそろそろお開きかな・・・

ヤスさんも同じ考えらしく会計の準備をしている。

余談だが、食事代はいつもヤスさんが払っている。

ヤスさん普段何やってるんだろう？ 多人数になっても1人で払うし、
実はヤスさんすごい人なんじゃ・・・

プライベート全然知らないんだよなヤスさんに関しては。

ナナさんとセイさんは俺の姉さんと同じ大学に通っているから知っ
てるけど。

タクシーを呼んで俺たちは解散となった。

次のライブはまだ決まってるから新曲でも考えるか・・・

わざわざデビュー延期してまで俺を高校に行かせてくれるんだ、ヤ
スさんやほかのメンバーには感謝しなきゃな。

・・・よし！ しっかり実力をつけていつて、高校卒業したらもう1

回『Toy Box Music』の勧誘を受けてやる！

プロローグ（後書き）

こんな感じでプロローグでした。

今回はプロローグなんで全然原作キャラ出てきませんでしたね（汗

世界感・原作の理解が完全ではないので矛盾等あると思います。

お気づきになりましたらご指摘お願いいたします。

主人公スペック紹介（前書き）

この小説はけいおん！の二次創作です。

桜が丘高校共学制、オリキャラが存在するため、不快に思われる方は読まないことをお勧めいたします

主人公スペック紹介

藍沢 臣 あいざわ しん

私立桜ヶ丘高校（共学制）在籍、1年1組 2年1組 3年2組
パート：ベース（一応ボーカル、ギター、ドラム）

11月12日（蠍座）、身長171cm、体重66kg 血液型O型、左利き、

オフモードでは眼鏡、髪も適当。オンモードはコンタクト、ウエーブのかかった感じ

使用楽器：フェルナンデス 臣Ver（off）、アトリエZ（on）レフティ仕様

ベースアンプ：Ibanez SWX65（自宅練習用）

地元No.1アマチュアバンドと言われている『SOUND STRIKE』のベーシスト。

安定したリズムセンスでバンド内でもプロにもっとも近い。（臣自身はこのバンドあつての自分だと思っている）

バンド内最年少の15歳。

『SOUND STRIKE』の主な曲はシンの作曲。
透も身近な目標として憧れている。

『SOUND STRIKE』

Vo. ナナ（七海）ななみ 18歳

Gt. セイ（誠）まこと 20歳

B a しん (臣) 15 歳
D r やす (康志) 23 歳

セイとヤスが集めたバンド。ナナはヤスが同大学サークルで勧誘。シンはセイと同大学の姉による推薦。

結成半年ほどで地元 No. 1 バンドとして注目を浴びる。

オフモード時はどこにでもいる普通の高校生。

1 歩引いた感じで物事を見るタイプ。

音楽に対しては切実に向き合い、その意志の高さはバンドメンバーも懂れている。

家族は父、母、姉の 4 人家族。姉は多方面に顔が広く、とても社交的。

バンド内では 1 番年下でメンバーのことは基本「さん」付けで読んでいる。

趣味はフェルナンデス Ver の改造。中学入学時に初めて買った最初の 1 本で、

今では自他ともに認めるワンオフ物になっている。

体力作りにも余念がない。(趣味の一環としてやっているような感じ)

桜ヶ丘高校に入学したのは、単純に 1 番近かったから。

廃部になりそうだった軽音部の熱烈な歓迎により、籍だけは置くことに。(のちに H T T のコーチとして指導する)

主人公スペック紹介（後書き）

ということで主人公のスペック紹介でした。

『SOUND STRIKE』のメンバーや登場するオリキャラに関しては要望があれば紹介します。

次から本格的に入ります！原作キャラも登場します！

世界感・原作の理解が完全ではないので矛盾等あると思います。

お気づきになりましたらご指摘お願いいたします。

1 曲目 入学式！（前書き）

ついに始まってしまいましたか・・・

思いつきでプロット書いただけなので、はたして臣とH-T-Tを中心に彼／彼女たちはどんな成長をするのか・・・

そんな感じで 1 曲目 入学式！ 始まります。

1 曲目 入学式！

4月某日

「我が私立桜が丘高校は、少子化により今年度から共学制となり・
」

長い・・・学校行事つてものはなんでこんなに無駄に長いんだろうか。

対外的に仮面を被つても實際が悪い奴は意味ないのに・・・
まあ痛くない腹探られるくらいならつていうやつなのか・・・
臣が周りを見渡すとやはりまともに話を聞いているやつなんてほとんどいない。

つてかあそこの子、完全に寝てないか？あつとなりの人に起こされてる。

「・・・これで第 回私立桜が丘高校入学式を終了します。」

ふう、入学式も終わったし今日はスタジオ取つてたはずだから、家帰って着替えて準備してすぐ入るか？

ちよつと早くても知り合いくらいいるだろうしな、それとも10G IA寄って時間潰してくか・・・

それと、俺にとってはどうでもいいとこだが、去年まで女子高だっただけに男女の比率が2：8くらいで圧倒的に女子が多い。

どうでもいいといったが、ここまで男女比に差があると男子の意見が通りにくいんだろな・・・
学校行事で黒歴史になるようなことがなければいいんだけど・・・

スタジオ

「やっぱりシンの作った曲はいつも完成度高いな！まあそれだけ練習しないとかつこつかないけど。」

「じゃあこれで歌詞つけてくるね！今日は徹夜かなあ？大学で寝れば・・・いやいや寝て大学で書くほうが・・・」

今日のスタジオは俺が作った新曲がメインだった。
もともと作曲するのが好きだった俺は、CDに焼いてみんなに新曲を聞いてもらっていた。

すぐにはライブ入ってないし、メンバーも新生活で入用だろうからいきなりブッキングされることはない。

ヤスさんはそういうところよく考えてくれてるからな。
おかげでこのバンドに入ってからはずごく充実してる。

活動にムリがないからうまく切り替えていつもメンバーの意識は高い。

「ヤスさんは気になるところありました？」

「いや特にならないな。細かいところはいつも通り各自アレンジ入れるんだらう？問題ない。次のスタジオで調整すればさ。」

「じゃあそんな感じで。そろそろ時間になるし1曲合わせて終わりますかね？」

結成から半年以上経った今では、メンバーの呼吸もわかって良く合っている。

特徴としては、ナナさんの声は透き通っていて高音域が得意だ。

セイさんは派手なテクが好きだけど、合わせの時は協調性がある。

(ライブでテンションが上がると即興でアレンジ入ることあるけど・・・)

ヤスさんは上手い。バンドのリズムを作る感じは結成当時からプロ級だったし、1番年長者だから余裕のある演奏をする。つまりミスがない。

俺は同じリズム隊のヤスさんの音をよく聞いているけど、ヤスさんは俺のベースあってだといつも謙遜する。(ヤス自体は本当にそう思っているのだが)

藍沢宅

風呂で1日の疲れを落として少しゆっくりしている。

父さんの仕事は朝がはやいのでもう寝ているが、母さんは洗い物が終わってネットサーフィン中。

姉さんは俺と一緒に笑い番組を見ている。

11時ころに番組が終わる。

「じゃあ俺そろそろ寝るわ。」

「「はぁーい、おやすみー」」

母さんと姉さんに軽く手を振って自室に戻る。

俺の部屋は1階でもともと両親の寝室だった部屋だ。

バンドを初めて、自室でも練習時間がほしかった俺が両親に頼んで譲ってもらった。

この部屋は防音完備の寝室だったらしく（理由は聞くな。つまりそういう部屋だ）夜でも練習できる。

「高校か・・・せつかくヤスさんがプロ入り蹴ってまで残してくれただ、しっかりやらんきゃな。」

臣は自室でフェルナンデス 臣Ver（中学入学時に初めて買ったベース。改造されて完全に臣のワンオフ物 通称：ローザ）を弾いている。

ローザを触るのは臣の中学からの日課で、体調不良で学校を休んだ

日でもローザを弾くことだけは休んだことがない。

「よし！今日もサンキューなローザ。さて寝るか。明日も学校あるし、遅刻なんてできないからな。」

臣はローザをしまつとベッドに入り、心地よい疲労感の中で1日を終えた。

2週間後

「よし今日は連絡事項なし。あつ部活入るやつは今週中までに入部届け出しとけよ。」

SHRが終わって放課後になる。

入学当時は女子の多さに少し戸惑うこともあったが、まあ慣れた。男子は少ないのですぐに仲良くなったし、それなりに女子とも話すようになった。

俺は『SOUND STRIKE』の活動あるから部活は関係ないし、今日は10GIAで弦見てくるか。

ローザの弦をフェルナンデスに戻すか・・・いやアーニーにするか？ダダリオは一般的だけど最近ピックアップいじったから合っ

い感じがするし・・・

臣は今日の予定を考えながら歩いていると、掲示板に目がいった。掲示板は前に姉さんの大学で見たような学校全体の掲示が貼っている。

そして掲示板の1番端に部活動の掲示板を見つけた。

今の時期は各部の勧誘ポスターが所狭しとある。

目が止まったのは、軽音部のものだった。

楽器を弾くようになってから音楽関係の雑誌やポスターを見つけると無意識に目が行くんだよな。

「軽音部、ギター募集か。入る気はないけど、入るっていうより同年代のレベルを見る機会ってあんまりなかったからな。今日はもう予定あるから・・・明日にでも行ってみるか。」

翌日、いつも通り授業が終わって放課後。

臣は軽音部を見に行くために音楽室に向かっていると、やまなかせんせい山中先生：通称さわちゃんとすれ違う。

山中先生は今年度から赴任してきた先生らしいが人当たりがよく女子生徒からは親しみをもって、さわちゃん・さわちゃん先生と呼ばれている。

担当は音楽らしいがさわ子先生（臣はさわちゃんとは呼ばない。前にさわちゃんとよばれて不本意そうな顔をしているのを見たからである。）ってヤスさんと同じ年とは思えないな。まあどっちが正しいことではないんだけど。

「さわ子先生どうも。」

「1組の藍沢くんだったかしら？そっちは音楽室しかないわよ。」

「ええ。ちょっと軽音部を見て来ようかと思ひまして。活動してるんですよね？」

臣が問いかけるとさわ子先生は少し困った顔をして事情を話してくれた。

なんでも部員が卒業生だけだったらしく、今年度は廃部、新入生が存続のためにメンバーを募集中とのこと。

一通り話を聞いたあと臣は、改めて音楽室へ向かう。

音楽室へ近づくとつれ、かすかに曲が流れてきた。

曲は翼をくださいか？練習……って感じではないな。まだバンドです！ってわけでもないのか、合わせもしていないな。音が甘い。

臣が音楽室の前に着いたときには、演奏は終わっていた。

音楽室の扉をあけると正面には1人の女子生徒。

入口左側にはさっきまで演奏していたと思わしき女子生徒3人。

（ああ勧誘ポスターにギター募集って書いてあったな。バンドも何もまだメンバー揃ってないのか。）

「あ……どなたですか？」

臣が軽く室内を見渡ししているとドラムの女子生徒が質問してきた。

「ああ。1年1組藍沢^{あいざわ} 臣^{しん}。一応は軽音部を見に来たって感じかな？」

「「「ギター!?!?!」」」

「いや見に来ただけなんだ。部活動はもともとしないつもりだし。」

3人はすこしがっかりした様子だ。

椅子に座っている生徒は蚊帳の外でポカーンと・・・いやボーっとしている。

「まあひらさ「唯でいいよ!私ももうみんなのことちゃんづけでよんでるし。」唯が入ったおかげでバンドも組めるし、これで一安心だな!」

4人+俺は音楽室でお茶会(なんでこんなところにティーセット?)を楽しんでいた。

「改めて。俺は藍沢^{あいざわ} 臣^{しん}。1年1組。楽器はベース・ギターができる。」

「じゃあ臣くんだね！私は3組の平沢 唯だよ！楽器は・・・ハーモニカできないんだろ！！」「ごめんなさい、できません！」

「私は部長でドラムの田井中 律。2組な。で、こっちがクラスメイトのベース、秋山 澪。」

「よろしく藍沢。」

「私はキーボード、3組の琴吹 紬です。よろしくね臣くん。」

自己紹介も済んでティータイムを楽しむ。(ティーセットやケーキはムギの持参らしい。ケーキは『SOUND STRIKE』の差し入れて食べるものよりも美味かった。)

「よーっし！これでメンバーも揃ったし完璧だな！」

メンバーが揃ってテンションも上がっている律が仕切る。
だがなにか引つかかるような・・・なんだっけ？

「・・・なあ部活動の最低人数って5人からじゃなかったっけ？(実際は新設ではないため5人いなくても部活動として活動できるのだが・・・)」

「「「「・・・ええ!?」「」」」」

4人は気づいていなかったのか、素っ頓狂な声をあげた。

「でも今ここに5人いるよ?」

「そうですね。」

5人?

・・・俺も人数に入ってるの?俺は入るなんて言ってないはずなんだが。

「藍沢、入部してもらえないかな?このままじゃ部活動として成立しないんだ。」

「でも俺はバンドには参加できないぞ?まあ裏方作業くらいなら手伝うこともできないけど・・・」

「それでもいいから!もう1人勧誘する時間なんてないんだよ!ここまで2週間待ってて見学に来たのだから唯と臣だけなんだから!」

「うーん・・・（部活動じゃなくって外バン組むってのもあるけど、まあバンドに支障が出ない程度になら大丈夫か。）じゃあマネージャーとか裏方的な位置でもいいなら・・・」

「よし！じゃあ決まりな！あつぶね〜！これで部活動として活動できるとよ〜！」

「じゃあ活動申請用紙出すから。申請書って今ある？」

「はいよ。部長は私だかな！」

「さっき自己紹介で聞いたよ。」

臣は必要事項を書き込んでいく。

「担当顧問？ってだれだろう？まあ提出の際にでも聞いてみるか。」

こうして臣は律部長率いる軽音部の5人目として入部することになった。
マネージャー

「じゃあ俺はコレ提出してくるわ。みんなはどうするっ？」

「今日はすることもないしこれで解散するか。みんなで職員室行くぜー。」

職員室についた一行はさわちゃんを見つけた。(さわちゃんは2組の担任らしい)

「さわ子先生、部活申請書持ってきました。」

「申請書？藍沢くん部活動新設するの？」

「いえ軽音部に入部することになりました。まあメンバーじゃなくて裏方ですけど。」

「そうなの。じゃあチェックするわね。・・・担当顧問が書いてないけど？」

「そこは去年の担当顧問の先生がわからなかったので記入してないんですけど。どなたですか？」

「うーん・・・軽音部の顧問だった人は昨年度で転任しちゃったのよ。しょうがないわねえ、名義は貸しといてあげるわ。これで申請

しとくわぬ。」

「「」

こうして私立桜が丘高校軽音部は存続するのであった。

後日

臣は音楽室で盛大に落ち込んでいた。

「新設じゃないんだから別に5人以上っていう制約はないじゃん・・・」

臣は生徒手帳を見て自分のうる覚えの発言を悔やむのであった。

「早くなにやってんだよ、みんなで写真取るぞ〜。」

こうして臣は軽音部に入部するのであった。

1 曲目 入学式！（後書き）

ということだ。1 曲目 入学式！ でした。

早くもオリ主は作者の手を離れ自分勝手に行動し始めている・・・

（笑）

今回は唯がギターを買う話し。つまりギー太誕生ですね。

オリジナルストーリーもありませんが、基本原作の流れに沿って物語を進めていく予定であります。

世界感・原作の理解が完全ではないので矛盾等あると思います。

お気づきになられましたらご指摘お願いいたします。

2曲目 楽器！（前書き）

唯がギターを購入する話し。

合わせて臣の実力が少し垣間見えます。

そんな感じで 2曲目 楽器！ 始まります。

2曲目 楽器！

音楽室

今日は『SOUND STRIKE』の練習も入っていないので軽音部のほうに顔を出している。

メンバーが揃ってから練習しているところを見てないんだが、俺がいる日に限ってたまたまお茶会なのか？

まあムギの持つてくるケーキは上手いからな。それだけでも俺としてはかなり得していると思う。

ムギ曰く、家で貰っても余ってしまうそうだ。

こんなうまいものが余るなんて・・・ムギってヤスさん並に不思議だ・・・

「ムギちゃんのケーキおいしそうだね・・・」

「唯ちゃん。はい、アーンして。」

「おいし〜」

ああ・・・ほのぼのしてるなあ・・・これはこれでなかなかまつたりとしていい時間・・・

「唯はギター買ったのか？」

そつだよ！まったりしてる場合じゃなかった。

俺が軽音部に入部した日の帰り道に楽器を持ってくるって話でみんな持ってきてるけど、唯はまだ持ってきてない。

というよりまだ買ってなかったのか！

「ギターっていくらくらいかなあ？5000円くらい？」

おいおい・・・5000円って。まあ選ばなければ買えないこともないけど。

「5000円でも探せば買えないこともないけど。長く使うものだし自分の気に入ったやつ買うなら5万くらいはないと選ぶことすらできないぞ？ちなみに俺のギターは8万くらいのやつ。」

「そんなにするの！・・・部費で落ちませんか？」

「落ちません。」

「うーん、おこずかい前借りしてみる。」

「まずはシヨップ行っていくくらいのがほしいのか見るのもいいんじゃないか？」

「じゃあ明日は放課後にみんなで10GIA行こう！決定！」

決定って・・・みんなの予定は関係ないのか。

まあメンバーのために予定あけるってのはいいもんだな。

俺は明日、用事が・・・そういえばないな。ヤスさんが週末にスタジオ入れたって言うってたし。

平沢宅

「貯金がない・・・」

唯は所持金の少なさに呆然としてると、

「お姉ちゃんどうしたの？」

唯の妹で1つ下の平沢ひらさわ 憂うれが部屋に来た。

憂は平沢家の家事全般を受け持つ良くてきた子だ。

「憂く私軽音部入ったんだ。」

「軽音部？お姉ちゃん楽器なんて弾けたの？」

「全然。でね、ギターを買うことになったんだけどお金が足りなくて……」

「じゃあお母さんに頼んでみよう？私も一緒をお願いしてあげる。」

「憂くありがとう」

翌日

放課後、軽音部のメンバーはいったん帰宅してから駅前に集合ということになった。

そして現在……

「なあ、今日の予定は唯のギターを見に行くことであってるよな？」

「なに当たり前のこと言ってたよ。」

「じゃあ俺は間違ってるはずだな・・・」

「「なんのこと？」」

「なんで唯がないんだよ！遅刻なのか？そうなのか！？」

そう現在集合時刻を10分ほど過ぎたところ。

唯以外のメンバーはすでに集合して15分以上待っている状態だ。予定していた電車はもう乗り遅れて次が来るのは役30分後。

10GIAまではすこし出なければいけないので30分は貴重だ。あまり遅くなっては女子の多い集団は危ないからな。

「あつ！あそこにいるの、唯ちゃんじゃない？」

ムギが横断歩道のところに目を向けている。

たしかに唯だ。

集団行動では1人の遅れが全体に支障をきたすというのに、すこし文句いってやるう。

と思ったのだが、隣の人と話して青になっても渡らない。

やっと渡ってきたと思ったたらあと数歩のところまで散歩中の犬と戯れている。

なるほど、家からここまでずっとあの調子で来たわけだ。

なんか文句言うのもバカらしくなってきた・・・

「ハア・・・」

どうやら澪は俺と同じことを思っていたようだ。

2人で顔を見合わせて、これからの軽音部に一抹の不安を覚えた。

30分後、電車に乗って市内まで行き10G I Aを目指しているのだが、やはり唯はすごかった。

ファンシーショップにフラフラと歩いて行ったり、今ならお金がか言って服を買おうとしたり・・・本当にいろいろだ。

しかも律やムギも一緒になっているため俺と澪だけではどうにも部が悪い。

結局、10G I Aに着いたのは電車を降りてから1時間以上経った頃だった。

10G I A

ここ10G I Aは周辺では1番大きな楽器店だ。

取り扱っている種類も多くレフティモデルも置いてあるため、中学

のころから常連である。

『SOUND STRIKE』が結成してからはさらに音楽機材に触れる機会が多く、ほとんどの店員は俺のどちらの見た目を知っている。

「おお！シンさんじゃないですか！女の子侍らせてにきいつすねえ」

親しげに話しかけてきたのは店長の奏一さん。

ライブにもよく来てくれているようで、レフティモデルの新作が入るといつも俺にためし弾きさせて感想を聞いてくる。俺の気に入ったやつはそのまま店長一押しとしてポップ出しされている。

レフティもなにも同じモデルが普通のタイプにもあるんだから自分の感想でとか思ったりもするが、それではダメらしい。

まあ俺もいろんなギターやベースに触れていい思いさせてもらっているが・・・

実際俺が『SOUND STRIKE』のライブで使っているアトリエZもこのためし弾きで一番気に入ったからだ。

「奏一さんそついうのは冗談通じないんでやめてくださいよ。今日はうちの軽音部でギター始める子いるんでその下見ですから。」

「へえ、高校でギターデビューか！いいねえ青春ってかんで。ゆつくり見て行ってくれよな！」

奏一さんは店の奥に下がっていった。休憩室つて、店長仕事しろ！

で、俺が店長と話している間に4人がいなくなっているわけだが・
唯と愉快的仲間たち+漣か・・・完全に流れ持っていかれてるだろうな。

早く見つけてやらなきゃ・・・

最初は一応ギターに惹かれるかと思って近くまで行ってみたが、案の定そこには影も形もなし。
と思ったら漣だけレフティモデルコーナーでトリップしている。
まさか漣が脱落しているとは・・・予想外だ。

「漣、今日は唯のギター見に来たんだぞ。お前いなきゃあの3人いつまでたつてもギター選びに来ないだろうよ。」

「でも！だってこのベースフェンダーUSAの新作で・・・こっちは店長一押しのアトリエZだし、こっちのギターは最近有名な『Girls be ambitious!』のモデルで・・・」

「はいはいわかったから今日は唯のギター優先しようねー。」

「いや〜！もつと見たいのに〜！」

俺は漣を連れて店内を探す。

漣はレフティコーナーのほうをチラチラとみている。

そんなに好きか・・・今度店長に呼ばれたら連れてきてためし弾きさせてやるつか・・・

そんなことを考えながら3人を探していると、前方に見覚えのある後ろ姿が。

「おい3人とも、今日は唯のギターだろ？なんでギターじゃなくてシンセのコーナーなんだよ？」

「あっ臣くんこのピアノすごく面白いんだよ！」

「唯、それはピアノじゃなくてシンセサイザーだから。店頭置きよっくに打ち込みはいつてるんだろ？」

3人を回収して改めてギターコーナーへ向かう。(途中レフティコーナーに行きそうになった漣は律に任せた。)

「臣くん。ギターってどうやって選ぶの？」

「初めてギター買うときは音はわからないだろうからデザインとか

ネックの太さとか、あと好きなアーティストがつかってるやつとかが一般的だと思うぞ。」

唯に説明しているが、唯は本当に聞いているのかいないのか・・・歩いていると突然唯が1本のギターの前で止まる。

レスポールのスタンダード。

現品限りらしく、価格は15万円。

「このギターかわいい!」

「かわいいって・・・それ15万円って書いてあるぞ?予算いくら持ってきてるんだよ・・・」

「おこずかい前借りと貯金たして5万円あるよ!」

俺と唯が話しているとみんなも集まってきた。

「15万かあく流石に値切っても5万じゃ買えないだろ。」

律がつぶやく。

俺も値切ったりすることもあるが流石に10万値引きってというのはムリがある。

「値切るって？」

「値切るっていうのはな、値段交渉で価格を下げてもらうことだ！私も今のドラムほしくて値切ったなあ。」

まあ15万のギターなんて値切っても10万はくだらんだろう。
あと5万・・・

「唯のギターのためだ！みんなバイトして稼ぐか！」

「バ、バイト・・・うん、唯のためだもんね・・・がっ頑張るよ！」

「漣、声震えてるぞ？大丈夫か？」

「漣は極度の恥ずかしがり屋だからなあ。」

「みんなちょっと待ってて。」

ムギがそういって店長が下がっていった休憩室のほうへ行く。
ちょうど休憩室から出てきた店長はムギをして態度を豹変。
電卓を取りだしなにやら打っている。

紬「もう1声」

どうやら値切っているようだが・・・あっ店長が若干涙目に・・・

「ムギ、一体いくらまで値切ってるんだ？」

「あのギター8万円ならって・・・でも唯ちゃん予算5万円ですよ？だから店長さんもう1こ「ムギストップ！足りない分は俺が払うからその辺でやめとけ。」臣くんが払うの？うくんじゃあわかった。唯ちゃんに伝えてくるね。」

「ムギ。俺がすこし払ったこといなよ。」

ムギに一応釘をさしておいて俺は店長を見る。

なんだかどこぞのボクサーよろしく真っ白になっている。

「奏一さん。あれ値切っても10万以上は確実だとおもうんですけど・・・」

「彼女は琴吹楽器の社長令嬢だよ。ここの大元。」

ムギって琴吹のお嬢さんだったのか!?

たしかにいつも持つてくるケーキや音楽室に置いてあるティーセットから一般人ではないとおもっていたが・・・

「俺が持つんで彼女に5万で売ってあげてください。俺が5万払います。あと次のライブのチケットつけるんで。」

こうして店長はすこし、本当に少しだけ元気を取り戻し、販売手続きを済ませる。

すべてが終わった店長は、また休憩室へ戻って行った。今日はもうでてこないだろう。

帰り道

「えへへ〜ギター太〜。」

唯はギターを大事そうに抱えて持っている。

俺も最初ベース買ってもらったときはこんな感じだったな・・・

「みんな今日は付き合ってくれてありがとう！私いっぱい練習するね！」

手痛い出費になったが唯がうれしそうだし気にしないことにしよう。

分かれ道でバラバラに帰っていくが澪だけはいつまでも残っている。

「どうした、帰らないのか？」

「臣、あのギター本当は5万じゃないでしょう？ありがとうね。」

どうやら澪はおれが足りない分の代金を払ったことを気付いたらしい。

まあ15万のギターが5万で買えるなんて普通ありえないからな。

「臣って軽音部に入部してくれたときもだったけど、結構優しいやつだよな。」

「別に優しいってわけじゃないよ。たまたま手元にお金があっただけ。それに好きなギターのほうが愛着わくし。」

「みんなありがとー！私、いっぱい練習するねー！」

「ほらな。良かったじゃんか。」

後日

「唯ギター練習してるか？」

俺が次に軽音部に顔出したときに聞いてみた。

「えっとね〜いっしょにポーズとって、写真撮って添い寝して・・・」

弾いてないのかよ・・・

唯は愛着がわきすぎてまったく練習できていなかった。

漣が『サルでもわかるギターコード』という本を渡しているが、コードの意味から教えないといけないらしい。

大丈夫なのか桜が丘高校軽音部・・・

2曲目 楽器！（後書き）

ということだ。2曲目 楽器！ でした。

10GIAって実在する楽器店だったんですね。

店長及び内装なんかはわたくしの勝手な想像です。

臣は『SOUND STRIKE』で稼いでます。打ち上げもヤスが払うので意外とお金持ちな設定。

今回はオリジナルが入ります。

『SOUND STRIKE』のライブに軽音部のメンバーが参加する話し。

世界感・原作の理解が完全ではないので矛盾等あると思います。

お気づきになりましたらご指摘お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8898o/>

けいおん！ ～桜が丘の原石たち～

2010年11月20日01時58分発行